

月刊『選択』 連載

思い出の国 忘れえぬ人々 第一回

「双子」のような印パ両首脳

元世界銀行副総裁

シンクタンク・ソフィアバンク シニア・パートナー

西水美恵子

「双子」のような印パ両首脳

「我が国が抱えるリスク、それは貧困に尽きる」。初めて会った時、マンモハン・シン氏は静かに、しかし一言一言に情熱を込めて、そう言い切った。一九九八年五月、インドが核実験を再開してから一週間足らず。パキスタンが初の核実験をもって応酬かと、世界中が息を呑んで南アジアを見つめ、印パ関係が抱えるグローバルリスクの認識を新たに始めた時のことだった。

二〇〇四年春の総選挙でインド首相となったシン氏は、当時野党の知的指導者として活躍中で、九一年に始まった経済改革の父として高名であった。モンスーン待ちのニューデリーは血が煮えたぎる様な蒸し暑さ。冷房など全く効かない国会事務室で、私はシン氏と長時間話し込んだ。ソファーにちんまり腰かけた彼の周りだけが、不思議に涼しかったのを覚えている。

二年後、シン氏と一言も違わない言葉を、思いがけない人の口から聞いた。

パキスタンの核実験に対する七カ国財務相・中央銀行総裁会議(G7)の経済制裁はクーデターの突発でさらに厳しくなり、数年来悪化していた経済状態を外貨危機寸前にまで追い込んだ。軍事政権など見たくもないと憤慨していた私は、国民を思えと部下に叱られ、クーデター後一年経ってやっと重い腰を上げて首都イスラマバードに飛んだ。

「我が国が抱えるリスク、それは貧困に尽きる」。本心では嫌々会ったムシヤラフ將軍(後日、大統領)が会談の冒頭で、軍服にはまるで似合わない情熱を一言一言に込めて言い切った。思わずシン氏と將軍の顔がダブって見えたのを思い出す。三十分の予定が三時間に膨らんだ会談中、幾度も両氏の似した考えと国を憂う情熱に触れた。

「將軍、いつか必ずマンモハン・シン氏とお会いにならねばなりません。印パ間の信頼を築くために。両国の平和と世界の安全保障のために」。インドと聞いてだけで嫌な顔をする側近をしり目に、シン氏のことをもう少し教えてくれと身を乗り出してきた將軍。彼の真剣な眼差しは、私の脳裏にいまだに鮮明に焼き付いている。

シン氏もムシャラフ將軍も、常に草の根の国民の視点から国家の百年先を見つめ、政策を考えていた。そして、国民の過半数が声なき民である事実を熟知していた。国民とは、貧困に苦しむ人々であり、女性であり、身体障害者であり、子供達であり、様々な少数民族であり、インドでは階級制度のどん底にある「アンタツチャブル」である、という事実を常に頭に置いていた。

両氏ともに自分を飾らない気さくな人柄である。草の根を自分の足で歩き、権力者を恐れる人々の心を開き、自分の目と耳と肌で彼らの夢と苦しみを学ぶ。それが自然にできる人であり、また、そうする時間を多忙なスケジュールから練り出す努力を惜しまない人だ。

インドもパキスタンも長年の政治家と官僚の汚職腐敗が国家財政を悪化させ、生産性を抑え、貧困解消を妨げてきた。権力者が甘い汁を吸い続ける有り様を前にし、親も子も、またその親も子も、何世代にもわたって社会のどん底に生き続けて来た人々。彼らが日常持つ挫折感は想像を絶する。同情や施し物はいらない、希望が欲しい、せめて我が子には教育を、と望む人々を裏切り、公共教育制度の内部までも蝕む汚職は、子供の人口密度を無視して学校を建て、建築費をピンハネし、教師資格のない人間を賄賂と票集めに雇い、教科書の配布制度をも腐らせる。

唯一の希望を断たれた彼らの挫折感は、積みり積もって吐き所のない鬱憤となり、暴動や一揆、宗教の過激化を促し、テロ行動ともなる。シン氏とムシャラフ將軍の洞察力は、それを自分の経験を基にしっかりと捉えていた。ゆえに、「我

が国が抱えるリスク、それは貧困に尽きる」と言い切るものであり、その言葉には魂が宿る様な沸々とした情熱を伝える力がある。二人とも自分の頭で理解し、ハートに確信を持って動くから、言動に矛盾がない。だから説得力があり、人がついて来る。

経済危機という背景上、ムシャラフ大統領とは頻繁に会い、お互い齒に衣を着せずに語り合つ仲になった。貧困解消を目標に置き、汚職追放を戦略とした改革が着々と進行するある日、消費税導入の会議を傍聴する機会があった。ある大臣がインフレになると反対発言。すると将軍が、「君、消費価格の一時的な上昇とインフレを取り違えてはいけないよ」と諭し、大臣が納得するまで、やさしく噛み砕いて教えたのだ。

会議の後、経済学者でさえよく間違つてをどうして将軍が、と問う私に、彼はニコニコするばかり。財務相と中央銀行総裁が代わって答えてくれた。「インフレの意味がどうしてもわからないから教えてくれとボスが言つたので、昨夜六時間も猛烈ゼミをやったんだ。おかげで今日は寝不足。でも大統領、これで合格です。おめでとつ」。爽やかな笑い声が響く官邸で、指導者こう在るべしと心底うらやましかった。

インドでは、シン氏を見習って声なき国民の声を聞こつと、膨大な国の草の根を歩くことに時間を費やしていた私は、彼に会う回数はいくつも少なかった。しかし、大きな疑問に巡り合つと必ず彼を訪れた。その草の根から様々な汚職形態を知り、政治改革なしには国民のためになる経済改革が不可能と悟る。

汚い金で動く政治から良い民主主義への推移を促す戦略は如何にと、シン氏に質問したことがあった。「女性だよ」の一言。びっくり仰天した私に、シン氏はこう教えてくれた。「政治家すなわち男は、皆何らかの利害関係に縛られ、脱するには世代交代に時間がかかる。一方、女には自分のことは後回しにするDNAがある。親のため、子のため、村のため、国のためをまず考え、捨て身に

なる勇気がある。女性議員を増やし育成すれば、良い政治を築く土台が思つより早くできる」。

女なのに気がつかず赤面の至りと恥じる私に、やさしかった。「中産階級の先入観と男の偏見は怖い。読み書きのできない女性達からこれを学びとるのに一生がかかってしまった。教育あるインド女性にさえ突飛すぎると笑われる。すぐわかってくれてありがとう」。

シン首相誕生の日はとにかく嬉しかった。そして、初の印パ首脳会談が待ち遠しかった。まるで一卵性双生児のような方々だから大丈夫と自分に言い聞かせながら一人でやきもきしていた。

○四年秋、ニューヨーク国連総会で実現した会談直後、両氏のこぼれるような笑顔とお互いを思いやるボディランゲージを見て、涙が出た。二人とも嘘をつけない性格で、心が顔と体に鏡のように映るのを知っているから。

この会談で、印パ関係正常化を阻害するカシミール問題の解決に対し、目標合意と何らかの戦略的政治決断があつたと読む。また、カシミール問題解決のリスクが両首脳 of 政治生命のものになったと考える。心から尊敬する二人の指導者に対し、世界平和のために末長くあれと祈らずにいられない。

著者紹介

西水 美恵子 (にしみず みえこ)

1975年、米ジョンズ・ホプキンス大学大学院博士課程修了後、プリンストン大学助教授(経済学)。80年に世界銀行入行。97年、南アジア地域担当副総裁に就任。2003年に退職。現在は独立行政法人経済産業研究所コンサルティングフェロー。07年に、シンクタンク・ソフィアバンク シニア・パートナー就任。著書に『貧困に立ち向かう仕事』。

著者へのご意見やご感想は、下記アドレスにお送りください。
個人メールアドレス nishimizu@sophiabank.co.jp

本稿は、西水美恵子氏が、月刊誌『選択』二〇〇五年一月号に寄稿したものです。
著作権は、著者に帰属しますが、配布は自由に行っていただけます。